

第55回名古屋春栄会  
演目のあらまし

平成30年1月14日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

翁（おきな）	1
経政（つねまさ）	2
半部（はしとみ）	3
国栖（くず）	4
盛久（もりひさ）	5
誓願寺（せいがんじ）	6
初雪（はつゆき）	7
車僧（くるまそう）	8
葛城（かずらき）	9
松風（まつかぜ）	10
三井寺（みいでら）	11
鶴亀（つるかめ）	12
花筐（はながたみ）	13
〔能のミ二知識	14〕

このリーフレットは、第55回名古屋春栄会の演目を解説したものです。  
演目の記載順は、番組の順です。  
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 翁（おきな）

---

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

## 経政（つねまさ）

---

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を消し給えとよ。灯火を背けては。灯火を背けては。ともに憐れむ深夜の月をも。手に取るや帝釈修羅の。戦いは火を散して。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩し我と身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身を焼く苦患恥かしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとて。その身は愚人。夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は失せにけり。

## 半部（はしとみ）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】内藤藤左衛門

【主人公】前シテ：里の女（面・増）、後シテ：夕顔の女の霊（面・増）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

京の都の紫野雲林院の僧が、90日にわたる夏の修行も終わりが近づいただったので、修行の間に仏に供えた花々の供養を行います。すると、白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が女に名を尋ねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません。僧がさらに問いただすと、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せてしまいます。

<中入>

僧が不思議な思いをしていると、ちょうどそのあたりの者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の幽霊であろうと述べて、僧に五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりを訪ねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、光源氏と夕顔の花の縁で歌を取り交わし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞を舞います。そして、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えてしまいます。しかし、そのすべては僧の夢の中のことでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

折りてこそ。それかとも見ぬ。たそかれに。ほのぼの見えし。花の夕顔。花の夕顔。  
花の夕顔。終の宿りは知らせ申しつ。常には弔らい。おわしませと。木綿附の鳥の  
音。鐘もしきりに。告げわたる東雲。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと夕顔の  
宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。また半部の内に入りて。そのまま夢とぞ。なり  
にける。

## 国栖（くず）

---

【分 類】四、五番目物（略脇能）

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

宮中で争いがあり、大友皇子に追われ、都を出た清見原天皇（大海人皇子）は、供の者に守られて吉野の山中、国栖まで逃げてこられます。川舟に乗って帰って来た老人夫婦は、我が家の方に星が輝き、紫雲のたなびいているのを見て、高貴な人のおいでになることを知ります。侍臣は老人に清見原天皇であることをあかし、何か召上がり物を差し上げてくれと頼みます。夫婦は根芹と国栖魚（鮎）を献上します。供御の残りを賜った老翁は、吉凶を占うべく、国栖魚を川に放ちます。すると、不思議にも国栖魚が生き返ったので、天皇がやがて都へお帰りになる吉兆だと喜びます。そこへ追手が迫りますが、夫婦は岸に干してある舟の下へ天皇を隠し、敵をあざむいて追い返します。天皇は老人夫婦の忠節に感謝し、身の拙さを嘆かれるので、夫婦も涙にむせびます。やがて、夜もふけ静まり、夫婦は何として御心を慰めようと思ううちに、妙なる音楽が聞こえ、老人夫婦の姿は消え失せます。かわりに天女が現れ、舞を舞い、次いで蔵王権現も出現し、激しく虚空を飛びめぐって、天皇を守護することを約し、御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

すなわち姿を現わして。すなわち姿を現わし給いて。天をさす手は。胎蔵。地をまたさすは。金剛宝石の上に立って。一足をひっさげ。東西南北十方世界の虚空に飛行して。普天の下率土の内に。王威をいかでか軽んぜんと。大勢力の力を出だし。国土を改め治むる御代の。天武の聖代かしこき恵み。新たなりける。奇瑞かな。

## 盛久（もりひさ）

---

【分 類】四番目物（雑能＝現在物） \*男舞

【作 者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：主馬判官盛久（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

平家の侍、主馬判官盛久は、捕われの身を、鎌倉へ護送されることとなります。その出発に際して、盛久は警固の武士、土屋某に頼んで、日頃信仰する東山の清水観音に輿をまわしてもらい、最後の祈願をします。やがて花の都に名残を惜しみつつ、東海道を鎌倉へと下ります。鎌倉に着き、旅宿に幽閉された盛久は、流転の身を振り返り、早く斬られたいと述懐します。そこへ土屋が訪れ。処刑の時が迫った由を告げたので、盛久は心静かに法華経を読誦します。夜明け方、ふと仮寝をした盛久は、夢の中で観音のお告げを受けます。かくて夜が明け、盛久は土屋に伴われて、刑場である由比ヶ浜に急ぎます。太刀取りが、彼の後ろから斬りつけようとする、盛久の手にした経巻から発する光で目が眩み、思わず取り落とした太刀は、二つに折れてしまいます。この知らせを受けた頼朝は、盛久を呼び寄せます。盛久は衣服を改めて、御前に参上し、尋ねに応じて、彼が見た、清水あたりから来た老夫婦が盛久の日頃の信心を嘉して、「われ汝が命に代るべし」と仰せられたという霊夢を物語ります。頼朝は、自分の見た夢と全く一致するので奇特に思い、盛久の命を助け、盃を与えます。そして盛久は所望にまかせて、御代を壽ぎ、我が身の喜びを添えて舞をまい、御前を退出します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

酒宴なかばの春の興。酒宴なかばの春の興。くもらぬ日影のどかにて。君を祝う千秋の鶴が岡の。松の葉の塵。失せずして正木の葛。長居は恐れあり。長居は恐れありと。まかり申しつかまつり。退出しける盛久が。心の内ぞゆゆしき。心の内ぞゆゆしき。

## 誓願寺（せいがんじ）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に來迎される模様などを表す莊嚴優美な舞が舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

笙歌はるかに聞こゆ孤雲の上なれや。聖衆來迎す落日の前とかや。昔在靈前の。御名は法華一仏。今西方の弥陀如来。慈眼視衆生現われて。娑婆示現觀世音。三世利益同一體。有難や。われらがための悲願なり。若我成仏の。光を受くる世の人の。わが力には行きがたき。御法の御舟の水馴棹。さきでも渡るかの岸に。至り至りて楽しみを。極むる国の道なれや。十悪万邪の。迷いの雲も空晴れ。真如の月の西方も。ここを去ること遠からず。唯心の浄土とはこの。誓願寺を。拜むなり。



## 初雪（はつゆき）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） \*中ノ舞

【作 者】金春禅鳳

【主人公】前シテ：姫君（面・小面）、後シテ：鶏の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

ある姫君が白い鶏を飼っていました。雪のように白いので「初雪」と名づけ、かわいがっていましたが、ある日死んでしまいました。姫君はひどく悲しみ、近所の上臈を集めて、供養をしました。すると、その初雪が空に現れ、弔いによって、極楽に行くことができ、楽しみつきない身になることができたと、しばらく懐かしそうに飛び回っていましたが、やがてどこかへ飛んで行ってしまいました。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

この念仏の功力にひかれ。この念仏の功力にひかれて。たちまち極楽の台にいたり。八功德池の汀に遊び。鳧雁鴛鴦につばさをならべ。七重宝樹の梢にかけり。楽しみさらに。つきせぬ身なりというつけ鳥の。羽風をたてて。しばしがほどは飛びめぐり。暫しがほどは飛びめぐりて。ゆくえも知らずなりにけり。

## 車僧（くるまぞう）

---

【分 類】五番目物（切能）

【作 者】不明

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：天狗太郎坊（面・大癒見）

【あらすじ】（今回の独吟の部分…下線部）

いつも牛のいない破れ車に乗って往来しているので「車僧」と呼ばれている奇僧がいました。ある雪の日、車僧はいつものとおり車に乗り、嵯峨野から西山の麓へやって来て、四方の雪景色を眺めて楽しんでます。するとそこへ、愛宕山の天狗が、山伏姿で現れ、この僧の奇行につけ込んで魔道に誘惑しようと、禅問答をしかけますが、軽くあしらわれてしまいます。そこで、自分は太郎坊だと名乗り、再度の挑戦を約して、雲に乗って飛び去ります。

<中入>

その後、溝越天狗と仇名される木葉天狗が出て来て、なんとか車僧を笑わせようと、さまざまなことをしますが、どうにもならず、これも逃げ去ってゆきます。やがて先の太郎坊が、今度は大天狗の姿で現れ、行くらべをいどみます。ところが、車僧の乗った牛もつけていない車は、太郎坊がいくら打っても動かなかったのに、車僧が払子を一振りするだけで、自在に雪の山路を疾駆します。太郎坊はその法力に驚き、どうおどかしても自若としている態度に恐れ入り、仏法を妨げるのをあきらめ、ついには敬意を表して合掌して消え失せます。

【詞章】（今回の独吟の部分の抜粋）

不思議やなこの車の。不思議やなこの車の。ゆるぎ巡りて今までは。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易す易すと遣りかけて飛ぶ。車とぞなりたりける。小車の山の陰野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。所から。ここは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡深き。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。げに雪山の道なりと。法の車路平かに。行くか行かぬかこの原の。草の小車雨添えて。打てども行かず。止むれば進むこの車の。法の力とて。嵯峨小倉大井嵐の。山河を飛び翔って。けばくすれども騒がばこそ。まことに奇特の車僧かな。あらたっとや恐ろしやと。がしょうをやわらげ大天狗は。合掌してこそ。失せにけれ。

## 葛城（かずらき）

---

【分類】 三番目物（鬘物） \*序ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思っ、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいると云って消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈ります。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内にぞ入り給う。

## 松風（まつかぜ）

---

【分類】三番目物（本鬘物） \*中ノ舞、破ノ舞

【作者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】シテ：汐汲女＝松風の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

ある秋の夕暮れ、都から旅に出た僧が、西国へ下る途中、須磨の浦に着き、由緒がありそうな一本の松を見つけます。土地の者に尋ねると、在原行平が愛した松風、村雨という二人の海女のゆかりの松であると教えられます。僧は、その松をねんごろに吊った後、近くの塩焼き小屋で一夜を明かそうと思います。やがて、二人の海女が、月明かりに汐を汲み、海女の身を嘆きつつ、車を引いて帰って来ます。僧は、彼女らに一夜の宿を乞います。姉妹は、見苦しい宅び住いを恥じて断りますが、重ねての申し出に、僧を請じ入れます。そして、僧が磯辺の松を吊った話をすると、二人はなぜか涙にくれます。僧が不審に思って、その仔細を尋ねると、自分たちは、実は、昔この浦に3年の間、流されていた行平中納言に寵愛を受けた松風、村雨の幽霊であると名乗り、行平との間の懐かしい思い出や、行平が都に帰ってまもなく世を去ったことなどを物語ります。そして、松風は行平の形見の烏帽子狩衣を手にしながら追憶の涙に沈みます。やがて、その装束を身につけた松風は、物狂いの状態になり、狂おしく舞い、松が行平であるかのように寄り添います。しばらくして、落ち着いた松風は、村雨と共に妄執の苦しみを述べ、あらためて回向を乞うように僧に頼みます。そこで、僧が目を覚ますと、既に夜が明けていて、松風の音が残っているだけでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

いなばの山の峰に生うる。松とし聞かば。今帰り来ん。それはいなばの。遠山松。これは懐かし君ここに。須磨の浦わの松の行平。立ち帰りこば。我も木蔭に。いざ立ち寄りて。そなれ松の。なつかしや。松に吹き来る風も狂じて。須磨の高波。はげしき夜すがら。妄執の夢にみみゆるなり。我が跡吊いてたび給え。暇申して。帰る波の音の。須磨の浦かけて吹くやうしろの山おろし。関路の鳥も声々に。夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしを今朝見れば。松風ばかりや。残るらん。

## 三井寺（みいでら）

---

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：千満の母（面：曲見）、後シテ：千満の母（狂女）（面：曲見）

【あらすじ】（仕舞〔道行〕の部分…下線部）

駿河国（静岡県）清見が関に住んでいる女には千満という子が一人あったが、かわかされて行方知れずなってしまったので、都に上り清水に参籠したところ、ある夜夢のお告げがあります。清水の門前の者が迎えに来て、その霊夢を占い、わが子に会おうとするならば三井寺へ行くよう勧めます。

<中入>

今夜は八月十五夜の名月なので、三井寺では住僧たちは講堂の前庭に出て月見を行っています。その中に、住職を頼ってきた幼い子も混じっています。寺の能力は、住僧に命じられて、幼い子の慰みのために小舞を舞います。そこへ女物狂が来るというのを聞いて、能力は呼び入れようと従僧に相談しますが、必要ないと言われま  
す。能力はあきらめず独断で女物狂を招き入れることにします。千満の母は物狂の姿となり、わが子の行方を尋ねて、都から三井寺にやって来ます。そして住僧たちが月見をしている場所に入り込んで来て、一緒に湖上の月を眺めます。能力が鐘を撞く鐘楼に上り、鐘を撞きます。幼い子が、女の郷里を尋ねるように頼むので、住僧が女に聞くと、清見が関の者と答えます。母と子は互いにそれとわかり、鐘が縁になって親子が再会できたことを喜びあいます。そして連れ立って故郷へと帰って行きます。

【詞章】（仕舞〔道行〕の部分の抜粋）

都の秋を捨てて行かば。月見ぬ里に。住みや習えると。さこそ人も笑わめ。よし花も紅葉も。月も雪も古里に。わが子のあるならば。田舎も住みよからまし。いざ古里に帰らん。いざ古里に帰らん。帰ればさぎ波や。志賀唐崎のひとつ松。みどり子のたぐいならば。松風にこと問わん。松風も今はいとわじ桜咲く。春ならば花園の。里をも早く杉間吹く。風すさまじき秋の水の。三井寺に着きにけり。三井寺に早く着きにけり。

## 鶴亀（つるかめ）

---

【分類】初番目物（協能＝唐物） \*楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

庭の砂は、金銀の。庭の砂は金銀の。玉をつらねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の柩。碓磼の行桁瑠璃の橋。池の汀の鶴亀は。蓬萊山もよそならず。君の恵は、ありがたや。君の恵は、ありがたや。いかに奏聞申し候。毎年のごとく鶴亀に舞をまわせられ。そののち月宮殿にて舞楽を奏せらりようずるにて候。亀は万年の甲を経て。鶴も千代をや。重ぬらん。千代の例の数数に。千代の例のかずかずに。なにを引かまし姫小松の。緑の亀も舞い遊べば。丹頂の鶴も一千年の。齡を君に授け奉り。庭上に参候申しければ。君も笑壺にいらせたまい。舞楽の数をぞ。奏しける。月宮殿の。白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬はさえゆく雪の袂を。ひるがえす衣もうす紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。霓裳羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿をはやめ。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

## 花筐（はながたみ）

---

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ、イロエ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：照日の前（面・増女）、後シテ：照日の前（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔クルイ〕の部分…下線部）

越前国（福井県）味真野にいた大迹部皇子は、皇位を継承することになり、急遽、都に上ります。皇子は寵愛していた照日ノ前のもとに使者を送り、別れの文と花筐を届けます。その文を読んだ照日ノ前は形見の花筐を抱いて悲しく我が家へ戻って行きます。

<中入>

その後、皇子は継体天皇となられ、大和国（奈良県）玉穗に都を移して、政を行っていましたが、ある日、紅葉狩に出かけられます。一方、照日ノ前は恋慕のあまり心が乱れ、侍女を伴ってはるばる都へとやって来ます。そして、たまたま御幸の行列に行き会いますが、朝臣に見苦しい狂女として払いのけられ、そのはずみで花筐を打ち落とされます。照日ノ前は、それは帝の花筐であるといつて咎めます。朝臣にその理由を尋ねられ、皇子とのかなわぬ恋の悲しみを嘆き、李夫人の故事を物語り、自分の思慕の情を歌えます。天皇がその花筐を取り寄せてご覧になると、確かに見覚えのある品なので、照日ノ前に狂気を収め、もとどおり側に仕えよとの御言葉に、喜んで一緒に皇居へと向かいます。

【詞章】（仕舞〔クルイ〕の部分の抜粋）

恐ろしや。恐ろしや。世は末世に及ぶといえど。日月は地に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を。荒けなやあらかねの。土に落としたまわば。天の咎めもたちまちに。罰あたりたまいて。わがごとくなる狂気して。とも物狂いと。いわれさせたもうな。人にいわれさせたもうな。かように申せば。かように申せば。ただ現なき花筐の。託言とやおぼすらん。この君いまだその頃は。皇子のおん身なれば。朝ごとのおん勤めに。花を手向け礼拝し。南無や天照皇太神宮。天長地久と。唱えさせたまいつ。み手を合わさせたまいし。おん面影は身に添いて。忘れ形見までも。お懐かしや恋しや。陸奥の安積の沼の花がつみ。かつ見し人を恋い草の。忍振摺りたれ故に。乱れ心は君がため。ここに来てだに隔てある。月の都は名のみして。袖にも移されず。また手にも取られず。ただ徒らに水の月を。望む猿のごとくにて。叫び伏して泣きいたり。叫び伏して。泣きいたり。

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。



太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>